魔法先生ネギま！～大空の翼～

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！～大空の翼～

【Ｎコード】
Ｎ２１３４Ｔ

【作者名】
白夜

【あらすじ】
ボンゴレボックスが生まれて、生き残った世界にいたほかの世界の百蘭、
その百蘭のいた世界の、壊滅したボンゴレファミリーのボス、沢田綱吉は、
消失した世界の神と出会う、百蘭と同じ誤ちを犯してはならないと、
神はツナを異世界へと送った。
徐々に記憶を取り戻していくツナはその世界でどうするのか。
（注意）ツナが段々性格がしっかりしていきます。

技がフェイトオブヒートの技など、ゲームからの技もあります。

設定（仮）（前書き）

ツナの設定です。話が進むに連れて
これも変えていこうと思います。
オリ技が出る可能性もありますので、ご了承ください。

設定（仮）

名前

沢田　綱吉

姿

戦闘時　ＸＡＮＸＵＳ戦の時の並盛制服姿

通常　戦闘時の服に、未来編始めの方に来ていたオレンジ色のパーカーを羽織っている

道具

・Ｘグローブ　ｖｅｒ．ノーマル

・Ｘグローブ　ｖｅｒ・Ｂ・Ｒ（×）

・ボンゴレリング（大空）

・ランチアのリング（必要ないかもしれない）

・死ぬ気丸

・レオンのベスト

能力

・超直感

・零地点突破・初代エディション　氷を発生させられる。並みの人間じゃこの氷は壊せない。

・零地点突破・改　相手の魔力や気を死ぬ気の炎に変換できる。

技（主にフェイトオブヒートから）

・ジェットキック　高速移動状態での蹴り

・ジェットアタック　高速移動状態での体当たり

・インパクトフレイム　Ｘフレイムの広範囲版、広範囲にしたので威力は落ちている

・Ｘ　フレイム　死ぬ気の炎を魔法の射手のように１箇所に打ち出す技

・Ｘ　ＢＵＲＮＥＲ未完成（×）　柔の炎で反動から体を支え、剛の炎を打ち出す技、圧倒的攻撃力を誇るが、コントロールなどができていないので、自分も吹き飛んでしまう。そのため、出力は控えめ

設定（仮）（後書き）

（×）は、まだ記憶が戻っていないか、覚えていない、
もしくはまだ持っていないものとお考えください。
あと、技などの能力も、（仮）なので、変化する可能性が出てきます。

プロローグ（前書き）

どうも、ネギまの伝説！も書いているのに、こんなものを書いてしまって、
更新は不定期ですが、読んでくださると嬉しいです。

プロローグ

ボンゴレボックスが作られたただ一つ、生き残った未来にいた、ほかの世界の百蘭。

その、ほかの世界にいたボンゴレファミリーは百蘭率いるミルフィオーレファミリーに壊滅させられた。
ツナは、かろうじて生きてはいたが、全く動けなかった。ただ、仲間の死体を見ているしかなかった。
百蘭はほかの世界の自分に、こっちに来てみないかと誘われ、百蘭はその誘いを受ける。

しかし、同じ自分が2人いることが、時空に変化を起こさせ、違う世界へ行った百蘭は、
自我を失い、その世界自身は、百蘭が時空のどこにもいなくなったことで、消滅した。

本来なら、六道骸の言っていた、六道輪廻のどこかに行くはずなのだが、
何故か沢田綱吉は、真っ白な空間にいた。

「え…？どこ！ここ？獄寺君！？山本！？京子ちゃん！？リボーン！？ハ「無駄じゃよ。」！？」

ツナは仲間の名前を叫んで探してみたが、いつの間にか居たお祖父さんに遮られた。

「無駄ってどういうことですか？」

ツナは聞いた。

「聞いたとおりじゃ。
ボンゴレ（貝）アルコバレーノ（虹）ミルフィオーレ（海）の３つの大空の１人が、
パラレルワールドに行ってしまった。それでそして世界の均衡が崩れてしまった。じゃがアルコバレーノ（ユニ）は死んでしまったが、
ボンゴレX世、お主はこの世界とは違う世界、つまりは異世界へ行くのじゃ。」

「……はぁ！？」

「なぜお主もパラレルワールドではないのかは百蘭と似たことをすれば、
お主も自我を失うかもしれんからの、だが今までの記憶を失うだけじゃ、お主は世界の消失で死んだから
違う世界へ行くときは、子供に戻るがな。いわゆる転生というやつじゃ。」

「いや、そうじゃなくて！と言うかお祖父さんは誰ですか！？」

「神じゃ、とりあえず１つの世界に１人の神がいるのじゃが、
神は死人を六道輪廻のどこかに行くか決めることをするだけだから、手出しができんかった。
ここ、人間道も、六道輪廻の１つじゃから、わしの寿命も、世界の消失でもうすぐ無くなるので、
さっさと六度輪廻以外の世界に転生（？）をさしてもらうぞ！」

「転生ってどこへ！？」

ツナが聞くが、

「記憶を消すし、時間がないんじゃ！問答無用！」

「え！？うわあああぁぁぁアアアアア！」

ツナは現れた穴に吸い込まれてしまった。

「すまぬな…ボンゴレX世、お主を生かすためとはいえ、異世界へとへ放り込んでしまった…。
記憶が戻らないことを祈ろうか……そろそろわしも終わりか……。さて、ボンゴレX世は…どの……世界に行った……かのう……。」

そう言うと真っ白な世界は無に包まれた……。

プロローグ（後書き）

まず、ツナは詠春に引き取られた子供として行こうと思います。

超死ぬ気状態化！（前書き）

どうもー、どこにツナをおくろうか悩んだら、ここに行きました。（笑）

超死ぬ気状態化！

「ツ～ナ～君！」

「ハア、ハア、あれ？どうしたの？このちゃん。」

あの後、神が送ったのはネギまの世界、そしてここは関西呪術協会の総本山、
そして、少年ツナに話しかけているのは、
近衛このか、ここの長、近衛詠春の娘である。

ツナは体を鍛えていた。何故？と聞くとわからない、
やっておかなきゃいけないと思って、と言っていた。
前世のリボーンの修行のせいかもしれないが、ツナには、魔力と気がなかったし、
運動も勉強もできなかった。そのせいで、
総本山の人から、落ちこぼれと言われたからでもある。
（つまり強くなって見返してやろうとしている。）

転生した時ツナは捨てられていて、
箱の中に27と書いた手袋、並盛のシャツにレオンの作ったベストもあった。
ボンゴレリングもあったしもちろん死ぬ気丸もあった。
そして手紙には、沢田綱吉と書かれていたらしい。
（ちなみにこの時のツナたちは6～7歳）

「また修行しているん？ツナ君。」

そう言ってくるのは、桜咲刹那、神鳴流剣士である。

ツナは魔法の存在を知っていた。偶然見てしまったのである。

「なんでだろうね、日課になっているからね。ははは っ」

ツナたちは京都の学校に通っている。何故かツナは方言ではないが、修行は主に体力を付けるため、本人は気づいてはいないが、超死ぬ気状態のための布石である。

「……っと、そろそろ学校へ行く時間だね。」

「そうやね、行こうか。せっちゃん、ツナ君。」

こういう生活が何年か続いた。勉強したおかげで、ツナの成績は平均ぐらいだった。

「じゃあ、行ってきます。長、ツナ君。」

中学生になった桜咲刹那は、麻帆良学園の女子中学校へ行くことになった。

このかは小学校の頃先にこのかのおじいちゃんが学園長の麻帆良に行っていた。

ツナは長の手伝いがあるので、まだ麻帆良にはいかないので京都の中学に通うことになった。

「行ってらっしゃい、またね、刹那。」

刹那はそう言うと、行ってしまった。

「ツナ君、ここに残ってよかったのかい？」

「まだいいですよ。それより、聞いていいですか？」
ツナは長に質問をする。
「自分がうんと小さいとき箱と一緒にに拾われたとき、箱に入っていた物はなんですか？」
「どこでそれを知ったんだい？ツナ君。」
「お手伝いさんの立ち話から聞いた。」
長はそう言うと、少したってから、着いてきなさい。と言った。
ツナが着いていくと、大事そうに保管してあった箱があった。
「……あれが、君の小さい頃に入っていた箱だよ。」
そう言って長は箱をツナに渡した。
ツナは受け取って、箱に入っていたシャツとベストを着てみると、何か懐かしい感じがした。
ツナは、長に1年間、実践訓練をしてくれと頼んだ。
長は戸惑ったが、ＯＫをした。そこは、前まで刹那が特訓していた部屋だった。
「ここでいいですか？」
「はい、広いほうがいいですから。」
そう言ってツナは、手袋をはめ、死ぬ気丸を飲んだ。すると、ツナの額からオレンジの綺麗な炎が
吹き出てきた。長は驚いていたが、刀を構えた。

「行くぞ…詠春。」

「！？…全力で来なさい！ツナ君！」

結果は経験の差もあって詠春の勝利だったが、１年間訓練しているうちに、
いつの間にか詠春を超えていた。今までのツナを知っている者たちは、
驚いてはいたが、落ちこぼれと言って悪かった、など謝罪してきて、
ツナは慌てて許したが、少し、認められたと思い、嬉しかった。

「ツナ君、麻帆良に行ってみないか？」

「このちゃんと刹那がいるところですね？」

「はい、そこにはお義父さんがいますから、大丈夫でしょう。」

「本心は？」

「強くなったから刹那と共にこのかの護衛を頼もうと」

「まあ、いいですよ、長がそこまで信頼を置く人が居るし…。」

（多少は信用ならないかもしれませんがね。）

詠春はそう思ったが、言わなかった。言えば行くことを拒否するだろうと思い。
そしてツナは、詠春の勧めで麻帆良に行くことになった。

超死ぬ気状態化！（後書き）

このかが溺れるイベントは書かないでおきました、じゃなく、書きたくありませんでした。
この小説でも溺れるイベントはありましたけれど。

ツナのクラスは女子中等部３－Ａ（前書き）

今回は少しギャグ？を入れてみました。

ツナのクラスは女子中等部３ー A

～中学校3年生の春休み最後の一日～

「じゃあ、長、行ってきます！」

ツナはそう言うと、行ってしまった。

「まさか、あの子がここまでたくましくなるとは…ふふふ、世の中何があるかわからないな。」

詠春はそう言うと麻帆良の学園長、近衛近右衛門へと電話をかけた。

「もうすぐ、娘たちの幼馴染がそちらに行きますよ。」

「なに！？ふーむ、綱吉君がここに来るとはの～。」

「クラスはどうしようかの～？」

「ふふふ、私にいい考えがあります。」

「それは……です。」

「ほう、それは面白そうじゃのぅ。」

そう言う2人の顔は、微笑んでいた、

いや、微笑むより、無邪気な笑いのほうが正しいかもしれなかった。

～麻帆良～

ツナは朝7時に総本山を出たが、ついたときにはもう１０～１１時

だった。

「これ、学校か？大きすぎないか！？京都の学校とは比べ物にもならないぞ？」

麻帆良に着いたツナはそう言った。
それもそのはず麻帆良学園は初等部から高等部まであるエスカレーター式の大きい学校である。
今は始業式みたいなので、とりあえず学園長室に向かった。

「ふぉふぉふぉ、懐かしいのう、綱吉君。」

「そうですね、学園長。」

「昔みたいにじいちゃんでもいいんじゃぞ？」

「丁重にお断らせていただきます。」

「つれないのぅ…あ、そうそう、君の教室は、このかと刹那君と同じ教室、３－Ａじゃ。」

「……はい？」

ツナは驚いた。ここは男子と女子で別れているのに、ツナに女子中等部に入れるというのだから。

「いや、共学のテストケースとしてな。」

「……男子が俺一人しかいないのにですか？もう少し、せめてもう２～３人共学のテストケースで入れてもらえませんか？」

「まあまあ、少し落ち着きましょう、学園長、沢田君。」
ヒゲのダンディ、高畑・T・タカミチが言う。
「落ち着いてはいれません。女子のなかに男子一人って辛いですよ。」
「ハハハ・・・・・確かにね……。」
ツナの一言にタカミチが苦笑いになる。
「……まあ、今日の夜に世界樹前に来てくれ。」
「いや、俺が女子校に通うこと前提なのかよ!?……はぁ、警備員の仕事ですか?」
「そうじゃ、侵入者をあまり殺さずにするのじゃぞ。まあ、今日はテストじゃけどな。」
「わかりました。で、俺の男子校としてのクラスはどこですか?」
「女子校の3ーAのクラスじゃ。いい加減諦めろ。詠春の許可もとってあるしの。」
それを聞いたツナは、もともとベ○ットみたいな髪型だったが、それが金髪になり、超サ○ヤ人になりそうなほど叫んだ
「詠春んんんんんんんんん!!!」

しかし、長の裏切りに声を上げたが、ツナが３－Ａに行くことには変わりはなかった。

ツナのクラスは女子中等部３ー Ａ（後書き）

女子のなかに男子一人ってインフィ〇ットストラトスか！って思った人、
すみません。

死ぬ気の零地点突破・初代エディション（前書き）

はい、今回は記憶を一つ思い出させます、
「零地点突破・改」じゃなくてごめんなさい。

死ぬ気の零地点突破・初代エディション

夜になり、ツナは世界樹のもとへと向かう、あの後、
クラスを変えるのは無理だと諦めて、寮の鍵をもらい、荷物を整理していたのだ。
ツナが世界樹にたどり着くと、そこには鬼などと交戦している魔法使いなどがいた。

「くっ！魔力を感知させずに我らに近づき、鬼を召喚し奇襲をかけるなど！」

魔法使いの1人が叫ぶ！

「しかも！こいつら強いぞ！」

ほかの者も叫ぶ。

「あわわ…！どうしよう、どうしよ～！」

ツナは慌てるが、そこに懐かしい声が聞こえた。

「神鳴流奥義！百列桜崋斬！！」

ズガガガガガガッ！　「ガアアアアァァァ！」と言って数十体の鬼が一斉に消える

「あれは…刹那！？」

懐かしき幼馴染がそこに居た。

ズガガガガガガガン
と銃を乱射している人も見つけた。
（一部の人は魔法使いじゃないんだ、それにしても強い人と弱い人の差が大きすぎると思うんだけど…）
「はっはっはっはっは！どうした？俺を倒さないのか？それとも、倒せないのか？」
鬼に守られている召喚士は、よほど魔力に自信があるのだろう、調子に乗り、どんどん鬼を増やしていく
「ははははは！鬼はまだまだ増えていくぜ！」
男がどんどん鬼を増やしていく。
「なぜだ！？なぜこんなことを！？」
魔法使いが叫ぶ。
「西洋魔術師には借りがある…だからその仲間もろともかっ消す。」
男がそう言い、顔などに凍れされて、凍傷になった傷が、見えたその時、
ツナに強い頭痛と記憶の波が襲う。
『カスの分際で、できると思うのか？』

『ＸＡＮＸＵＳ、お前に、十代目の座は渡さない！』

『死ぬ気の零地点突破・初代エディション。』

『がああああ・・・。』　ビキビキッ

「な……！？」

言った覚えのない自分の言葉、そして見知らぬ場所、目の前に凍りついていく男。

「死ぬ気の…零地点…突破…？…十代目…？…ＸＡＮＸＵＳ…？」

ツナはいきなり脳裏に現れた記憶に困惑する。

「わあああ！」

顔を上げると、鬼に段々押されてきている学園側が見えた。

「こうしちゃいられない！」

ツナはグローブをはめ、死ぬ気丸を飲んだ。

「ジェットキック！！」

ツナは超死ぬ気状態になり、炎を使った高速移動で鬼の顔を蹴っていた。

「なんだてめえ！？」

鬼の顔が怒りに染まる。しかし今のツナは動じない。

「すました顔しやがって…やっちまえ！」

「…零地点突破・初代エディション」　パキイッ・・・

一斉に襲いかかる鬼たち、しかし、一瞬で凍った鬼たちを見て、魔法使いたちは唖然とした。

「な・・・なんだお前は！これは氷の魔法なのか…？」

上位召喚士は叫んだ

「俺は…沢田綱吉。そして、これは魔法ではない。」

ツナの声も姿も凍った鬼が遮ったせいで召喚士以外に聞こえなかったし、見えなかった。

（ボンゴレ？世（ジョット）の死ぬ気の零地点突破の境地…ボンゴレⅠ世（ジョット）…？）

ツナは零地点突破・初代エディションを使えたことと、ボンゴレⅠ世（ジョット）と言う知らない記憶に困惑しつつも、ツナは炎で召喚士の前まで移動する。

「初代エディション」

そして鬼全部と召喚士の両手両足を冷凍する。

「や、やめろおおおおおおおお！！」

「悪く思うな。」

「がっ・・・！」　…ガクッ

そう言ってツナは超直感で召喚士の首元に手刀をいれ、気絶させた。
召喚士が気絶したことにより、鬼が煙になって消えた。

「こいつは学園長のところへ持っていくか…。」　ボウッ

ツナは炎の高速移動で男を持って学園長室まで移動していた。

「なんだったんでしょうか、あの人…。」

魔法使いの誰かがつぶやいた…。

～学園長室～

ツナは男を床に置く。

「で、夜に行ったら鬼たちがいてタカミチの姿が一切見当たらなかったんだが何故だ？」

そう聞くと、タカミチは

「君が来る前に行こうとしたらあの鬼たちが現れて、助けに行こうとしたら
学園長に止められてね。君の力量を見たかったらしいよ。」

タカミチがそう言うと、

「ふぉふぉふぉ、綱吉君、召喚士のことは予想外じゃったが、あれだけ見ればテストをしなくても良いじゃろう。君を麻帆良の警備員としても迎えよう。報酬も払うぞ。」

学園長はそう言ってニヤリと笑った。

「そういえば、あそこに刹那がいたんですけど。」

「ああ、刹那君はこのか君の護衛と少し警備員をしてもらっているんだ。」

「まあ、今日はゆっくり休んで明日の7時にまたここに来てくれ。」

「はい、ありがとうございました。」

そう言ってツナは学園長室を後にする。

（さっきの記憶はなんだったんだ？
…超死ぬ気状態の俺が金髪で大人の姿を見ていたようだった…。）

ツナの頭にはずっとそれが引っかかっていた。

死ぬ気の零地点突破・初代エディション（後書き）

どこで記憶を戻すか悩んだんですけれど、
「かっ消す」のあたりで思い出したと思っておいてください。

桜通りの吸血鬼（前書き）

何かグダグダになってしまいました。

桜通りの吸血鬼

「ふわぁぁ～～～、眠い…昨日の鬼退治で結局寝たのは2時だしなぁ。」

ツナは眠たそうにしていた。今の時間は約6時50分、ツナが寝たのは約4時間半のみ、

今、ツナは学園長室前にいる、

「失礼します。」

ツナはそう言うと、学園長室の中に入る。

「ふぉふぉふぉ、よく来たな、綱吉君。」

「おはよう、綱吉君。」

「おはようございます。タカミチ、学園長。」

部屋に入ると、2人が挨拶をしてきたので、ツナも挨拶を返す。

「今日は明日行く3－Aのことを少し教えておこうかと思ってな。」

「そうですか。明日なんですか。」

そうしている間にメガネをかけた赤毛の少年がやってきた。

「お邪魔します、学園長。」

「…？誰ですか？この子。」

「ああ、これから世話になる３－Ａの担任で
英雄、ナギ・スプリングフィールド（サウザント・マスター）の息子、
ネギ・スプリングフィールドじゃじゃ。」

「…英雄の方はよくわからなかったけれど、とりあえず俺の担任なんですね？」

「え？担任って・・・？」

「そうじゃ、共学のケースにしようと思ってな、ちなみにネギ君は魔法使いじゃ。」

「学園長！一般人にそれを言っては！！」

ネギが学園長の言葉を慌てて否定したが、その慌てぶりから丸分かりである。

「大丈夫だよネギ先生。俺も魔法の存在も君が修行で来ていることは教えてもらっているから。
（主に詠春から）そして、これから1年間よろしく。」

ツナがそう言うとネギはホッとした。

「ふぉふぉふぉ、ネギ君、綱吉君は明日から、そちらに行くから、もう行ってよい。」

「はい、ありがとうございます。それと、綱吉さん、よろしくお願いします。」

「女子の中に男子1人かぁ、鬱だ、ああ、ネギ先生、俺のことはツナでいいよ。」

「はい、それではまた、ツナさん。」

ネギはそう聞いて返事をし、部屋を出た。、

（ツナさん…か、なんだか懐かしい感じがしたな。）

「それと、綱吉君、警備員の仲間は３－Ａに2人いるからの。」

「刹那の他にもいるんですか？」

「ああ、瀧宮　真名と言ってな、銃使いじゃ。」

（エヴァのことは言わんでよかろう。）

（銃って言ったら、ＸＡＮＸＵＳっていう人を思い出すな。）

「じゃあ、そろそろ転入手続きをするからかえって良いぞ。」

「はい、わかりました。」

そう言ってツナは学園長室から出ていった。けれどその足取りは重かった。

それからツナはあまりやることがないので、麻帆良の探索していた。

そうしている間に、気が付けば夜になっていた。

「ここは、桜通りの入口か…。」

ゴオオオッ

「へ？」

ツナが見たのは、ネギと同じぐらいの年齢の女の子だった。

「なんなんだ～？一体こんな時間に…って、俺も人のこと言えないか。」

（え…っと、あれは吸血鬼のエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マグダヴェルだっけ？）

ダダダダダダダ　「今度はなんだ？」

エヴァンジェリンが通り過ぎたと思っていたら、今度はネギ先生が走ってきた。

「ツナさん！エヴァンジェリンさんがどちらに行ったかわかりますか？」

ネギが聞くと、

「このまま真っ直ぐに行ったけど、相手は吸血鬼だ、何があったかはわからないが、
１人じゃ心配だし、俺も行こうか？」

とツナが言うと、

「えっと、じゃあ、お願いします。先に行っています！」

そう言うとネギは行った。

「さて、俺も行くか。」

そう言って、ツナは死ぬ気丸を飲み、ネギの後を追った。
そこでは、屋根の上で戦っているようだった。

「ふふふ、坊や、血を吸わせてもらうぞ…。」

「うわあ〜〜〜〜！」

「させない！ジェットアタック」

「させません。」

ツナはネギの血を吸おうとしていたエヴァンジェリンに高速のタックルをかますが、
障壁と謎のロボットの妨害でエヴァンジェリン本体には当たらなかった。

「くっ！」

「いいぞ、茶々丸、そいつをそのまま抑えておけ！」

「はい、マスター」

茶々丸と呼ばれたロボットがツナを足止めをする。

ちゅうううううう

そうしている間にエヴァンジェリンはネギの血を飲む。

「あっあっあっ！」

「うちの居候に何してんのよーーー！」

パキィ！　ドゴッ！

「にゃあああああ！！」　ズザザザザ！

「「「　！！？　」」」

いきなり現れ、エヴァンジェリンにそのまま跳び蹴りを入れたオレンジ髪の女の子にその場にいた全員が驚いた。

「なっ…障壁を貫いただと！？貴様は、神楽坂明日菜！」

「あれ？あんたうちのクラスのエヴァンジェリン？」

「マスター、血が。」

「うう、命拾いしたな、」

エヴァンジェリンと茶々丸は捨て台詞を吐いて一時退散をした。

「ネギ、大丈夫！？」

「ネギ、すまない、俺が不甲斐ないばっかりに。」

オレンジ髪の女の子とツナはネギに近寄る。

「うわあああああん！アスナさ～ん！ツナさ～ん！怖かったよ～～～！」

ネギが泣いて抱きついてくる。

「あーはいはい、泣かないで。」

「まぁ、確かに血を吸われたら怖いわな。とりあえず、ネギの知り合いが来たみたいだし、俺は帰るよ、またな、ネギ。」

そう言って立ち去ろうとすると、

「えと、ネギを助けてくれてありがとう。私は神楽坂明日菜、あなたは？」

「俺は沢田綱吉、それと、実際ネギを助けたのはあんただ。じゃあな。」

そう言って今度こそ帰ったツナ。

「さ、帰ろうか、ネギ。」

「うっ、ぐすっ、…はい…。」

ネギとアスナも、家に帰った。

「なにか、嫌な予感がする…。それに、あのエヴァンジェリン・A・Kマグダウェルに
目を付けられたかもしれない、襲われないよう用心しなければ…。」
（しかし、あの人は何故か悪人と言う感じはしなかったな…。）
寮に戻っている道で、ツナはそう思った…。

「あの男…魔力や気を使わずに、どうやって飛んでいたのだ？」
エヴァンジェリンが飛んでいた謎に付いて独り言を口にした。
「確かに、魔力や気は感じませんでしたが、強い熱源反応があの人に見えました。」
「そうか…炎を噴出して飛んでいたのか、ん？どうやって炎を出していたんだ？あの男は…。」
「すいません、マスター、わかりません。」
、魔力、や、気、と全く違う、死ぬ気の炎、の存在に、エヴァンジェリンは困惑していた。

桜通りの吸血鬼（後書き）

３－Ａでどうやってツナを生活させていこうか…
早く修学旅行編まで行きたい…
獄寺と山本も出そうかな…？

カモ君登場（前書き）

感想をもらい、獄寺と山本などのＲＥＢＯＲＮキャラは出さない可能性が
一気に高まりました。
赤き翼に、ツナの父親としてジョット（ボンゴレＩ世）を入れようかな？

カモ君登場

「この3日間で何回ここを往復しなきゃいけないんだよ・・・。」

ツナは何度目かわからない学園長室に向かっていた。

「今日からか、3－Aに行くのは、憂鬱だ。知り合いがいるのは助かるが、女子だけじゃなあ…。」

ツナはもう、言っても無駄なことを何度も言っていた。

「失礼します。」

そう言ってツナは学園長室に入った。

「やあ、綱吉君、何度も来てもらってすまないね。」

タカミチがそう言う。

「警備員の仕事は時々することにしますね。学園長。」

「ふぉ！？何故じゃ！？仕返しか！？」

「それもありますけど、このちゃんの護衛が主なので。」

「うぬぬ・・・・！」

ツナはほとんど護衛のためにここに来たので、学園長が反論できなかった。

しかし、ツナの顔は、仕返しという部分が大きかった。

「綱吉君。君のクラスには隠しているだけで、結構魔法関係者がいるからね。」

「は…はぁ…そうですか。」

「失礼します。ツナさんはいますか？」

「いるよ、ネギ先生。」

ネギが来たので、ツナはネギについて行った。

「ネギ先生、昨日は大丈夫だった？」

「うう、休もうかと思いましたけど、アスナさんに強制的に…。」

「エヴァンジェリンに噛まれた傷は大丈夫？」

「はい、魔法で治療しました。」

「話を戻すけど、まあ、教師が仮病ってカッコがつかないからね。」

「だって！エヴァンジェリンさんがクラスにいるんですよ！」

「……ゑ？」　（嫌な予感はこれだったのかぁぁ！？）

どうやらネギの話によれば、エヴァンジェリンはネギのクラスにいるようだ。

「しかもツナさんはそのエヴァンジェリンさんの隣の席です。」
「それって変えるのは無しか？」
「いえ、決定事項なんですよ。」
（あまり悪人って感じはしなかったけど、あまり近くにはいたくないな。）
「はあ…怖いなあ…。」
「危なくなったら、助けられる範囲、助けるから、元気出せって。」
（まあ、血をすわれて怖がるのは当然か）
そう言ってネギは扉に手をかける。
「ちょ、まっ、なんで黒板消しトラップがあんの！？」
「ふえっ！？」
ツナは黒板消しがネギに当たる前に捕った。
「あはは…。」
「ありがとうございます…。」
ツナは苦笑いをした。ネギはお礼を言い、教壇の前に行った。
「今日は、転校生（？）を紹介します。」

ネギがそう言うと、教室が騒ぎ立った。扉の前にいるツナでさえ大きい声だったのだから、
教室内ではもっと大きかっただろう。

「えと、共学のテストケースで来た人ですから、男の人です。」

ネギがそう言うと慌ててツナとネギは耳をふさいだ。

「えええええええええええ！？」

さっき言った時よりも、大きい声だったのだから耳をふさいで正解だったようだ。

「み…皆さん静かにしてください！…えと、ツナさん、入ってきてください。」

そう言うと、ツナは教室に入り、教壇の前に立つ、少し見回してみると、
知っている顔がいくつばかりかあった。

「…学園長の陰ぼ…じゃなくて、共学のテストケースで入ってきました。沢田綱吉です。
一年間よろしくお願いします。」

ふと、知っている顔を見回すと、

このちゃんは、学園長に知らされていたのか、あまり驚いてはいなかった。

刹那は驚いた顔をしていた。

明日菜さんは唖然としていて、
エバンジェリンは予想道りという顔をしていた。
茶々丸と言われたロボットは、少し表情が変わっていた。
（ロボットなのに表情変わるんだ。）
ツナがそう思っていると、
「はいはーい、沢田君、私は朝倉和美、少し君の事取材してもいいかな？」
と朝倉さんが取材をしに来たが、ツナは個人情報を取るのか？と思い、
「取材した資料はどこに行くんだ？」
「それは、内緒です。」
「なっ！どこ行くかわからない個人情報を簡単に教えられるわけないだろ！」
ツナは即効で断った。
「ちょ、ちょっと待って、なら、この中で気になる人は？」
「いや、３－Ａの皆さんとは初面識だから、気になる人とかはまだ…。」

（一部知り合いはいるけどね）

ツナの正論に、朝倉さんは反論はできなかった。

「では、エヴァンジェリンさんの隣に。」

ネギがそう言うと、ツナは席に座った。

「それでは、授業を始めます。」

それからは、授業が終わるごとにクラスの人が話しかけてきた。ツナには、
自分と同い年の親友は、特訓などをしていたので、せいぜい2～3人なので、
多くの人に詰め寄られるのは、精神的に疲れることだった。
しかも隣のエヴァンジェリンはツナのことをじっと殺気をもって見ていたからので尚更である。

キーンコーンカーンコーン……

と、4時間目が終わり、昼食の準備をしていると、

「久しぶりやなあ、覚えとる？うちのこと。」

と、このちゃんが話しかけてきた。

「覚えているよ、このちゃん。」

久しぶりにあったこのちゃんは、綺麗になっていた。

「よかった、昼食一緒に食べへん？」

「いいよ、さすがに女子だけが周りにいると辛いからね。話し相手が欲しかったんだ。」

昼食をとり、午後の授業を終え、
ネギと共に寮に帰る道で、

「ごきげんよう、沢田綱吉、ネギ・スプリングフィールド。」

その声に対して、ツナとネギは戦闘態勢を取る。

「まて、今の私は魔力を極限まで封印され、ただの人間だ。」

そう言い、エバンジェリンは歯を見せた、それは昨日見せた鋭い歯はなくなっていた。
それを見たツナとネギは構えをとく。

「沢田綱吉、貴様に聞きたいことがある。」

「な…なにっ！？」

ツナは今はただの少女のエバンジェリンに怯えていた。

「貴様はどうやって空を飛んでいた？魔力や気も貴様からは感じられんし…。」

「な、なんでそれをお前に教えなくちゃいけないんだよ！」

「ちっ…やはりか、来週まで楽しんでおくんだな！」

そう言ってエバンジェリンと茶々丸が帰っていった。

（茶々丸……いたんだ…。）

ツナはエヴァンジェリンが居なくなった安堵で冷静に周りが見えた。意味はないが。

「お困りですかい？兄貴。」

下から声が聞こえた。

「あっ！カモ君！」

「へ？イタチが喋ってる？」

「ツナさん、この子はオコジョ妖精のカモ君。」

「兄貴、この人は？」

「この人は沢田綱吉さん、僕のクラスの生徒で友達です。」

ツナとカモは初面識なので、両方を知っているネギに紹介をしてもらった。

だが、1週間後の戦闘のことを、エヴァンジェリンと茶々丸以外知らない。

カモ君登場（後書き）

エヴァンジェリン戦は、ネギと明日菜の仮契約の後に出そうと思います。

エヴァンジェリン戦（前書き）

ツナの仮契約カード、どうしよう、コメントください。
あと、文才もください。

エヴァンジェリン戦

2日後

「…どうしたんだ？ネギ。」

ツナは傷だらけになっているネギに聞いた。

「うう、アスナさんと仮契約をして、茶々丸さんに魔法を放ったんだけど、
やっぱり茶々丸さんは生徒だから、戻したら自分の方にあたっちゃって。」

「すまねえ、ツナの旦那、2対1は卑怯だったからやり返したほうがいいと言ったばっかりに
こんなことになっちまった。」

「いや、それはネギが決めたことだからいいけど、ツナの旦那って言うのはやめて欲しいよ。」

ツナはカモの言葉に旦那ということはやめて欲しいと言った。

「じゃあ、ツナの兄貴と。」

「じゃあ、それで。」

3人（？）で話しながら教室に向かった。

それからの4日間は、何事も起こらずに過ごせた。そして、一週間目

「調査停電？」

「そうや、年に2，3回あるんやけどな。」

学校が終わり、このちゃんと共に寮に戻っている道で

（一週間前にエヴァンジェリンが言ったあの言葉はもしや！）

そう思い、寮に戻ると、ネギの元へ行った。しかし、ネギが見つからぬ間に

時間が過ぎていった。

「くそっ！もう11時40分か！ネギはどこへ…ん？」

…ドォォォォオン

「多分、いや、絶対あそこだな。」

そう言い、死ぬ気丸をのみ、ツナは学園の橋へと全速力で飛んでいった。

橋についたときは、ネギは倒れていた。

「インパクトフレイム！」

そう言い、ツナはエヴァンジェリンに向かって攻撃をしたが、よけられた。

「やはり来たな、沢田綱吉。」

「全部呼ぶのは長い、だから、ツナでいい。」

「ふ、分かった、ならば貴様も私の名は長いからエヴァと呼ぶがいい。」

そう言っている間にツナはネギを安全な場所に避難させた。

「ネギに何をしたんだ？」

「なに、魔法同士でつば競り合いをしただけさ、私が勝ったがな、年季が違う。」

「そうか。」

「ついでに貴様の血も吸わせていただこう。」

「いいぜ、俺に勝てたらな。」

「ツ…ツナさん！これは僕とエヴァンジェリンさんとの…」

「ネギ、お前はつば競り合いで負けた、その時点で勝負は終わった。だから今回は俺と交代だ、だがこの敗北で、お前はまだまだ強くなれる。」

「ふ…リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　来れ氷精　闇の精闇を従え　吹雪け、…闇の吹雪」

「零地点突破・初代エディション」

襲いかかる闇の吹雪を凍らせ、エヴァにXフレイムを放つが、かわされる。

「ははは、直線的な攻撃じゃ当たらんぞツナよ！
リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　闇の精霊　５０柱　魔法の射手　連弾　闇の５０矢」

詠唱後、エヴァから５０もの魔法の射手が放たれた。

ヒュッ…ボボボボボッ！「！？ぐあああああああああっ！」

ツナは５０のうち約２０矢はかわしたが、残りの約３０矢はモロに喰らってしまう。

（ずっと前に、こういうのがあったような気がする…。）

やられざまにツナの脳裏に浮かんだ忌々しき記憶、それは、

（本当の零地点突破に、そんな構えはない！）

（俺は俺の零地点突破を貫くだけだ。）

ズドドドドドド

（ぐ…あああ！）

（ふはははは、それで終わりか、沢田綱吉！）

（…しっかり当てろよ…次はうまくやってみせる。）

（そんなに当ててもらいたいなら当ててやるぜ！）　ズガガガガガ！

（…零地点突破…改）

「零地点突破…改…か…。」

そう言い、ツナは立ち上がり、ＸＡＮＸＡＳに告げた時と同じ言葉をエヴァに告げる。

「次はうまくやってみせる…。」

「はっ！何をしている！それでは格好の的だぞ！

リク・ラク　ラ・ラック　ライラック……魔法の射手！連弾　闇の５０矢！」

エヴァは詠唱をし、魔法の射手を射つ。ツナは片手を下に、片手をそれに乗せ、

親指の間がひし形になるように構える。

「零地点突破…改！」

「なにっ！」

ヒュンッ　　ガッ　「がっ…！」

エヴァは何が起きたかわからなかった。ただ、自分の魔法が途中で消え、

相手の手や額にある炎が大きくなり、目に見えないスピードで攻撃してきたこと以外は。

「貴様…！何をした！」

「お前の魔法を吸収し、自分の力に変えただけだ。」

「吸収だと！？なんだその技は！？」

「違うな、これは技じゃなく境地だ。そして「零地点突破　改」は氷や岩などの固形物質じゃない、魔法の射手や雷などの実態のない魔法を吸収し、力に変えられる。」

「お前……バグキャラか？」

「バグとはなんだ？」

ツナは聞くが、エヴァが答えるまでに茶々丸が叫んだ

「停電の回復が予定より7分27秒早い！マスター！戻ってください！」

「っ！ええぇ！いい加減な仕事をしおって！」

エヴァ急いで橋の上へ飛ぼうとしたが

チリッ

「キャン！」

いきなりエヴァの体に感電したかのように紫電が走った。

そして、電撃が収まると、エヴァ真っ逆さまに落ちていった。

「おい、これはどうなっているんだ！」

「マスターは結界の影響で魔力が使えず今はただの１０歳の子供です！あと泳げません！」

「なんだとっ！？」

焦っていた茶々丸から、泳げないと聞いたツナは全力でエヴァのところへ向かった。

ガシッ！　バシャア

ツナの手にはエヴァとネギの杖が握られていた。

「…おい、貴様、なぜ助けた？」

「…さあな、あんたはそれほど悪人って感じがしなかったからな。」

そう、ランチアさんみたいに…

そう言い、橋に戻ると、ネギを持つ明日菜と、茶々丸がいた。

「着いたぞ。明日菜さん、ネギにこれを渡しておいて。じゃあ、俺は帰るよ。また明日。」

そう言ってツナは帰る、しかし、思ったよりエヴァの魔法の射手３０矢を喰らったダメージが大きかったので、あまり寝られなかったらしい。

「イダダダダダ！なんかデジャブだよこれぇ！」

エヴァンジェリン戦（後書き）

はい、今回から「零地点突破　改」が使えますね。
記憶を取り戻す場面は、うろ覚えで書きましたので、
原作と違っている場所もあるかもしれません。
ちなみに最後のは骸戦で初ハイパー化したあとのツナですね。

いざ！京都へ！（前書き）

いろいろ飛ばしている気もありますが、京都です。
あと、うろ覚えです。

いざ！京都へ！

エヴァとの戦いから数日後、ツナとネギは学園長室に呼ばれた。

「修学旅行で頼みたいことがあるのじゃ。」

「修学旅行…ですか。」

「そうでじゃ！京都じゃ！」

ツナはエヴァから受けた傷が癒えないまま聞くと学園長はそう答えた。

「京都にはお父さんの別荘があると、エヴァンジェリンさんが言ってました！」

「しかし学園長、魔法先生がいるのに何故京都は観光ＯＫを？」

「ほっほっ、詠春の義理の息子の君が居るからじゃないかね？」

「そういうもんですか…。」

「まあいい、木乃香の護衛を頼むぞ。」

「言われなくても分かっています、学園長。って、それだけですか？」

「いや、関西からの妨害もあるじゃろうから、クラスの人が怪我しないようにと、

ネギ君の親書を長に渡す手伝いを」
「長だけなら俺一人でも行けますよ？」
「いや、これも修行の１つじゃ。」
まあ、そんなこんなで修学旅行に京都行きが決定した。
～そして当日～
「いやあ、楽しみですね！」
「ははは…ぶっちゃけ父親の情報が欲しいだけじゃ…。」
ツナは小さい声でそういった。
「あ、つきましたよ！」
ツナとネギは新幹線前についた。そして仮契約などの話をして時間をつぶした。
時間になり新幹線に乗った。しかし、
「ネギ君、俺たち６班はどうするんだ？エヴァと茶々丸がこれないから班の人数が足りないし…。」
「う…ん、じゃあ、２人にはこのかさんのいる５班に、ザジさんはいいんちょさんの３班へ」
「わかった／わかりました」　（こくっ）

そう言ってツナと刹那は5班の方へと向かった。

（なぜ5班だけ7人なのかは置いておくか…。）

「ツナ君、せっちゃん、同じ班やな。」

「そうだね、こn「失礼します。」…刹那？」

「あ…、せっちゃん…。」

そう言って刹那は向こうに行ってしまう。

（う～ん、やっぱりあの事件が関わっているのかな？）

ツナの言うあの事件が何かは、わからないが、考えている途中で叫び声が聞こえた。

「きゃーー！カエルーーーーー！？」

カエルが大量発生していた。　ツナの顔が少し引き攣る。

「ツナ君～！助けて～！」

「ハイハイ。」

カエルを次々袋に入れていく。

関西魔術協会がやっている妨害だろう。なんというか…いろいろひどいな。

第一印象は…地味だね、あと姑息。どさくさに紛れて親書奪おうとしているし。

とりあえず、カエル１０５匹全部捕まえたが、何故か先が思いやられる感じだった。
親書を奪われたネギは、刹那によって取り返せたが、疑いをもたれたらしい。

ちなみに班は

１班　柿崎・釘宮・椎名・鳴滝姉妹
２班　春日・古・超・長瀬・葉加瀬・四葉
３班　朝倉・那波・長谷川・村上・雪平・ザジ
４班　明石・和泉・大河内・佐々木・瀧宮
５班　綾瀬・明日菜・このか・早乙女・刹那・のどか・ツナ

「ーーーまもなく京都です。お忘れ物のないようーーー」

「それではみなさん！楽しい思い出を作りましょう！」

「「「「「はーーい」」」」」

（さて、今度はどんなトラブルが待っていることやら。）

そう思うツナをよそに、３ーＡは京都の地へと降り立つ…。

いざ！京都へ！（後書き）

短いですね。ツナのアーティファクトはどうしようと考えています。
できればツナのアーティファクトのコメントをください。

修学旅行1日目（前書き）

修学旅行1日目です。
ところどころ飛ばしています。

修学旅行1日目

「京都ぉーーーーーーーーー！」

「これが噂の飛び降りるアレッ！」

「誰か！！飛び降りれ！」

「では拙者が…。」

「おやめなさいっ！」

（このクラスに来たときから、元気のいいクラスだと思っていたけど、
修学旅行でテンションがハイになってるな）

ツナはそう思ったが、自分自身もテンションが高くなっているので、人のことは言えないが。

「それにしても修学旅行か～、楽しみだな～～！」

「そうやね～、ツナ君。」

そうやって、ツナはこのちゃんと清水寺を回っていた。

「ここが清水寺の本堂いわゆる『清水の舞台』ですね。本来は本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらうための装置であり、国宝に指名されています。有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで…』の言葉通り、江戸時代に実際に２３４件の飛び降り事件が記録され

ていますが、生存率は８５％と意外に高く…」

「うわっ！？変な人がいるよ！？」

「夕映は神社仏閣仏像マニアだから。」

「マジかよ…俺だったら絶対覚えられないって…。」

ツナ達は綾瀬の説明を全然理解ができなかった。

「…何で勉強できないの？」

「勉強、嫌いなんです。」

そのあと、ネギが皆から一緒に行こうと誘われ、
ツナ、木乃香、明日菜のいる５班と一緒に行くことになった。

それからの、関西呪術協会の妨害は、仕掛けられた落とし穴、その落とし穴の中にいた大量の蛙。

（関西って、蛙が好きなのかな…？）

とツナ達は思ったが、すぐ、その考えをやめた。
なぜなら約半分のクラスメートが酔いつぶれてしまった。

なんとか新田先生などの先生を誤魔化し、残ったクラスメートとネギ、しずな先生達が、
なんとか、バスに押し込み旅館に向かった。

ツナとネギとカモは影で見ていた刹那に気づいたが、それに気にす

る余裕はなかった。

そして今は、そんな一騒動を終えツナとネギは、露天風呂でゆっくりとしていた。

「ふぅ～、疲れたぁ。」

「そうですね～。」

「でもよ、ネギの兄貴、ツナの兄貴、あの桜咲って奴も怪しいんだぜ、
気を抜かない方がいいんじゃねえか？」

「いや、刹那はこのちゃんの護衛だから敵じゃないんだが…。あとカモ、ここ動物禁止じゃ…。」

「いいじゃねえですか。」

「それより、どういうことでですか？」

「いや、それは…！？」

しかし、ツナの声は、突然入ってきた人に遮られた。

「あ、男の先生かな？」

そう言ってツナとネギはそのまま扉の前に視線を向けた。

（あれは、……なっ！？刹那？）

（ええっ！？ここって男湯じゃ！？）

（混浴ってんだ、それより2人とも隠れるぞ！）

ツナとネギは言われるまま岩陰に隠れた。ネギは様子を窺いながら杖を取り出したが、
ツナは何故この時間に刹那が風呂に入るのかを気にしていた。

（なあ、今の時間風呂って先生用じゃないのか？）

（知りませんよ、僕らはこの時間に入るように言われていたんですから。）

「…困ったな、魔法使いであるネギ先生ならなんとかしてくれると思ったのだけど…
ツナ君は鍛えてはいたけど、魔法も気もないからな…。」

（！？）

（いや、確かに、俺は魔力も気もないけどさ、言われると傷つくな…。）

ネギは自分が魔法使いだと知っていたことに驚愕、ツナは少し傷ついた。

（まさか、本当に関西呪術協会のスパイ…！？）

ネギは手にある杖を無意識に握り締めた。
ほんの一瞬でもネギを敵と認識してしまった。

「！…誰だっ！？」

その一瞬でも殺意を向けられた刹那は気づいた。
瞬時に夕凪を取り出し、構える。
そのまま殺意を向けられた岩へ踏み込む。

「斬岩剣！！」

太刀での一閃、岩は鋭い音と共に真っ二つに切り裂かれた。

「なっ岩を！？」

「岩も斬るのかよ神鳴流って！」

ツナ達はなんとか斬った岩をよけたが

「逃がさん！」

既に刹那はネギの前まで迫っていた。

「っ！ラス・テル　マ・スキル　マギステル　風花　武装解除！！」

バシッ　「！？ふっ。」

魔力が練りこまれた風は、刹那の夕凪を弾いたが、獲物を弾かれた
だけでは止まらず、
そのままネギの元へ行き、ネギの首を絞めた。

「にゃああ！？」

「何者だ、言わねば殺すぞ。」

「あわっ、あわわわ…。」

「ってあれ？ネギ先生…。」

「ツナの兄貴！見てねえで助けてくだせえ！」

「えっ？」

ネギの首を離し、自分の後ろを見た。そこには、怯えていたツナが見えた。

「ツナ君…っ！？」

そこで刹那は自分がどのような状態か気づいた。

ツナは焦ってタオルを刹那に渡すと、脱衣所から悲鳴が聞こえた。

「今の悲鳴は…このちゃん！？」

「お嬢様！？」

「えっ？お嬢様って…？」

ネギと刹那は脱衣所に走っていった。ツナはさすがに女湯の脱衣所に行くのはダメで、
しかも今のツナでは戦えないと分かり、刹那に任せて男湯の脱衣所に服を着に向かった。

上がったあと、服を着て、部屋でゆっくりとしていると、
猿の着ぐるみをした女がこのちゃんを抱え、ネギたちが追っているのが見えたので、
「関西呪術協会に拐われたのか！？助けなきゃ！」
ツナは手袋をはめ、死ぬ気丸を飲み、ベランダから追った。

修学旅行1日目（後書き）

戦闘は次回にします。プリーモが赤き翼の1人で
詠春にツナのためにボンゴレボックスを託したことにしようかな…

修学旅行1日目？（前書き）

遅くなりました。勉強・・・テスト…（（（（；゜Д゜））））

修学旅行1日目？

「くっ、あの着ぐるみはどこへいったんだ！？」

ハイパー化し、猿の着ぐるみをした女の元へ飛んだツナだが、迷っていた。

「っ！？あっちか！」

だが、ツナは持ち前の超直感で場所をつかんだ。

「お嬢様を返せっ！」

ツナが迷っていた頃、
このかを連れ去った奴らと戦闘をしていたのはネギ、明日菜、刹那の3人で、明日菜がハマノツルギ（ハリセン）、刹那が夕凪（刀）で闘い、ネギが詠唱をしていたところだった。

ギィン！

そのうち刹那はこのかを持つ女に切り込むが、女の後方から現れた影によって防がれた。
鋭い金属音をし、互いにぶつかりあった刀の反動で、両者は後ろへ飛ぶ。
刹那は素早く受身を取ったが、もう片方は

「きゃあああ〜〜〜」

悲鳴と取れない声を出しながら転がっていった。

（あの太刀筋は神鳴流！？まさか敵方にも雇われていたとは！？）
刹那は自分と同じ剣術を使う相手に動揺していた。
そうしている間に、目の前の相手は立ち上がる。

「ど～も～、神鳴流剣士の月詠言います～。以後よろしくお願いします。先輩。」

「ほな、月詠はん、頼みましたえ！」

「あ、待て！逃がさん！」

「あ～ん、せんぱいの相手はうちですえ～！」

このかを連れて逃げようとする女を追おうとする刹那だが、
月詠から来る斬撃を夕凪で防ぐので動けない。
動いても月詠はそれについてくるのでぴったりと離れない。

「ほほほ！そんな野太刀に二刀流の剣技は相性悪いやろ！足止めは成功やったな～！」

高笑いをし、自身の式神にこのかを運ばせ逃げようとする女を許さないのが二人、

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　風の精霊１１人　封鎖となりて敵をつかまえろ　　ーーーーー」

「ああ！しもうた！」

「遅いです！」

ネギから放たれた１１発の風の魔法は一気に女に殺到した。
不意をつかれた女はこれをよけることは出来ない。

「ひぃ～～～～！お助け～～！」

女はすぐ近くにいたこのかを盾にした。

「っ！？曲がれぇ！！」

ネギは咄嗟に矢の向かう方向を変え直撃を回避した。

「このかさんを離してください！卑怯ですよ！」

「え・・・あら・・？」

女は一瞬呆けたがすぐに理解した、それと同時に憎たらしい笑みを浮かべる。が、

「っ！？？」ドガッッ！

「このかは返してもらったぞ。天ヶ崎千草。」

いきなり現れたツナの攻撃によって倒れ、このかはツナの腕の中にいた。

「くそ、なんやお前は、いきなり現れて人のもんかすめ取りよってぇ！！」

「…誰が、お前の…だ？」

身勝手な怒りに体を震わせる千草と呼ばれた女。
向かいに立つツナはその身勝手な怒りに反応し、千草達、３人、を見るツナ。

「つ、ツナさん！」　「遅いわよツナ！」

「つ、ツナやと！まさかあの魔力も気も何もない落ちこぼれ、沢田綱吉か！？」

「それがどうした。」

（あれが、ツナ君！？）

千草は落ちこぼれと罵っていた奴にやられた屈辱、刹那は弱いと思っていた親友に対する驚き。

「く・・・そっ！」

そう言い、千草は懐から式神の符を取り出そうとするが、それは月詠に遮られてしまう。

「何するんや月詠はん！」

「あきまへん、あのお人はあきまへんで」

月詠の姿は小太刀を構え千種を構えるように立っている。

「…うちの名は月詠言います～、お名前は沢田綱吉でいいどすか～

？」

「……ああ。」

「さわだつなよし、うふふふ、つなよしはんやね～」

月詠はつなよしの名を何度も言う。

「貴様らなんのつもりだ！？」

このかをネギたちに任せ、ツナの傍に駆けよってきた刹那が睨みながら言った。

手はいつでも抜刀できるよう、夕凪に手をかけながら

「ああ、そうやった、つなよしはんだけやなくて、せんぱいもおったね、うふふふふ、うちは贅沢もんやな～、でも、今日の所は引かして貰いますえ」

「逃がすと思うか？…っ！？」

言うと共に、切りかかろうとするが、それはツナによって遮られる。

「なぜ止めるの、ツナ君！？」

「刹那、お前は目の前の敵しか見えていない、もっと周りを見たほうがいい。」

「え？」

「ふっ、まったく、付け入る隙もないか」

その時、この場に小さくともよく響く声が聞こえた――

修学旅行1日目？（後書き）

時間がなくなったので、今回はここまでです。

修学旅行1日目？（前書き）

短いです。前回は3分の2ほどで切ってしまったので、今回は短いです。
大切なことじゃないですが、二回言いました。

修学旅行1日目？

いきなりその場に現れた水溜りの中から出てきた何かは、だんだんと少年の形になっていく。
白い髪、学生服を着た少年、フェイト・アーウェルンクスは若干ため息混じりにそう言った。

「新入りっ！？」

「あら～、どうも～。」

「どうやら、無事のようですね。」

そう言っても、そうなるタイミングできたんだけどね。そうアーウェルンクスは心の中で付け足した。
そのあと、すぐにツナ達に視線を向ける。

「まさか、落ちこぼれと言われていた君に気づかれるとは、思っていなかったよ、沢田綱吉。だが、やはり、実力は本物だったようだね。」

「新入り！この落ちこぼれのことを知っとるんか！？」

「麻帆良に向かわせた調査員が調べてね、零地点突破という不思議な技を使い、あのエヴァンジェリンを倒したと報告が入ってまして。」

（あれは停電の復旧が早かったからだが、あのまま続けていたら分からなかったがな。）

「なっ！？あのエヴァンジェリンをこの落ちこぼれが！？」
アーウェルンクスが言った言葉は、千草たちを驚愕させるには十分だった。そして更に言葉を加えた。
「そして、彼に向かわせた式神たちは、誰一人、戻ってはこなったけどね。」
淡々と語るアーウェルンクス、千草は恐怖で顔を青くし、月詠はみるみる興奮で顔を赤くしていた。
刹那も驚き、ツナに聞く。
「つ、ツナ君！？その式神たちはどうしたの！？」
「ん？ああ、あの鬼たちは面倒だったから一瞬で倒したよ。」
零地点突破、初代エディションで、後始末がめんどかったから湖に投げ捨てたけど。
「あ、そうそう、派遣した式神の数は２～３０だったよ。」
ツナとアーウェルンクスその言葉で、刹那達の顔はまた、驚愕に染まった。
だが、アーウェルンクスはそれを無視し、言葉を加える。
「今回は引きましょう、目的はあくまでも『奪取』なのですから、それが叶わない今、ここに用はありませんしね。」
そう言うとアーウェルンクスは水のゲートを開き、千草たちを包み

込んだ、ツナはそれを止めようとしたが、アーウェルンクスによって放たれた石の魔法に遮らえる。
そして、2人を包み込み終え、自身を包む瞬間、ツナを見据えていった。

「では、今度はせいぜい気をつけることだね、沢田綱吉。」

その言葉だけを残し、消えた。

その後、このかの目が覚めたが、その瞬間、刹那は驚き、逃げてしまう。

「せっちゃん…。」

「大丈夫だよ、このか、刹那はお前のことを嫌ってはいない。だから安心して、今は寝ておけ。」

そのことに落ち込むこのかだが、それを励ますツナ、

「あれ？今ツナ君、今このかって…？それに口調も…、まあ、ええか、今は、眠…たい…し…。」

そう言い終え、このかは再び眠ってしまった。
その後、先生たちに見つからないように部屋に戻るのは大変だったと、告げておくよ。

同時刻、アーウェルンクス、

（ああは言ったけれど、彼の力量は計り知れない、彼を検索しても

魔力も気も何もないけれど、ならば何故彼は空を飛べていたんだ？
…これから彼に対する警戒心を高めておこう…。）

修学旅行1日目？（後書き）

アーウェルンクスのツナに対する警戒心が高まりました。
…次は刹那たちに死ぬ気の炎のことを説明しようか…？
いや、麻帆良祭編の時の方が手っ取り早いか…？

修学旅行2日目（前書き）

今回はフラグを作ってみようかと…失敗かもしれませんが

修学旅行2日目

このかを救出して次の日、ネギが告白されたり、朝倉に魔法がバレたりと、いろいろ大変な一日だった。その夜、

「ネギ君＋ツナ君のラブラブキッス大作戦〜！」

「…は？」

部屋でＴＶをつけると、その画面がでた。なんか３－Ａの人たちが写ってる・・・っ！？キス！？なんで！？

そんなことも気にせず朝倉は司会を進めていく…。メンバーの中に刹那とこのちゃんが入ってるのは何故だ！？

「え？もしかして二人ともこっちにきてる？…逃げようか。」

どこに行ってもヘタレな男である沢田綱吉。

「ツーナ君！」

ガラガラ

「え…。」

（なんでこんな早く来るのー！？）

「え、えと…何？」

そう言うと、このかはＴＶを見て、

「へー、ＴＶ見てたんやな、なら、わかるよな～。」

「ご、ごめんねツナ君。」

（このちゃんも刹那もなんで俺なの！？嬉しいけど困るよ！？）

そういうとツナは思い出す、カモの仮契約は女性はなにか快感とかが来るらしい…カモや朝倉…まさか！？さすが超直感、そういうすぐ答えがわかる。

「ちょっと、ごめんね、用事があって…。」

「外でたら新田先生に怒られるえ？」

「そうですよ？ツナ君。」

「じゃあ、このちゃん達は・・・？」

「うちらはええんよ。」

（理不尽だー！）

そう思いながら窓から逃げる。何か暴走している二人が追いかけてくる。

（刹那はともかく、なんでこのちゃんそんなすごいのさ！？）

「うちは図書館探検部やで？」

（心読まないでー！？）

「神鳴流…斬空剣！！」

（なんで奥義ー！？今の俺ただの人間だよ！？死ぬよ！？）

「これでどうやー！」

（なんで縄！？なんで持ってるの！？）

その叫びも、魔法で暴走している二人には意味がない。それどころか、

「おーっと、桜咲、近衛コンビ、全力で行っているー！」

「わー、すごい！」

「さすが・・・。」

というやり取りをしているほどだ。

「雷鳴剣！」

ズシャーン！

「うわあああああ！！」

いろいろな攻撃を無茶苦茶によけるツナ。

「いい加減捕まりーや！」

「嫌だよ！？このちゃん達目が怖いから！」

今の二人の目は光が消えて捕食者の目になっている。

「はっ！」

少しの恐怖で硬直したところを狙われてしまった。

「うわっ！」

そしてツナは転んでしまった。

「やっと捕まえたよ、ツナ君～♪」

「うわあああああ！？？」

チュ…

「う、うわあああああ」　ブーッ！！

「え？ツナ君ー！？」

ツナは鼻血を吹いて倒れてしまった。…まあ、仕方ないよね。

「仮契約かんりょー！」

「優勝したのは、刹那、近衛コンビと、のどかだぁー！」

「わーーーーーー！！」

その後、ツナが起きたのはみんなの正座が開放されてた直後だった。

修学旅行2日目（後書き）

今回、二人に二人に仮契約させました。…ネギまの世界でボンゴレファミリー作ろうかと考えています。…メンバーどうしよ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2134t/

魔法先生ネギま！～大空の翼～

2011年10月10日02時48分発行